相馬九方と土屋鳳洲を巡る学者群像

2024.3.23　於：岸和田市立図書館

1　48 年前の出会い（昭和 51 年）

●岸和田市立郷土資料館(平成 19 年 3 月 31 日廃止)での展示「和泉文化資料展」
菅甘谷・相馬九方・土屋鳳洲・春田横塘・唐金梅所・岡野半牧・濱田青陵・松波仁一郎

●昭和 53 年　岸和田市立図書館創立 50 周年記念行事
「泉州地方の印刷文化について」出口神暁氏の講演と展示
「江戸時代の教育－寺子屋・私塾・藩校をめぐって」永野仁氏の講演と展示

2　九方・鳳洲を巡る学者の系譜・・・**別紙**

3　人物紹介

●荻生徂徠（おぎゅう　そらい 1666-1728）

江戸時代中期の儒者。父の方庵(ほうあん)は五代将軍徳川綱吉に仕える医師でしたが、徂徠が 14 歳のときに咎を受け、江戸を追放になり、母の実家のある上総本納村(現･千葉県茂原市)に移り住みます。父が赦されると、徂徠は江戸に戻り、苦学の後、元禄 9 年（1696)、徳川綱吉の側用人の柳沢吉保に見出されてこれに仕え、将軍綱吉にも謁見して名を成した。朱子学に反対し、言語の考察にもとづく「古文辞学」の立場から中国古代思想の研究を行なうとともに、詩文の制作にも積極的にとりくみ、江戸に漢詩を流行させました。将軍綱吉が死去後、柳沢吉保はあっさり隠居したため、四四歳の徂徠は柳沢邸を辞して日本橋茅場町に住み、塾を開き、後進を育成し、門人に太宰春台、服部南郭、**菅甘谷**などが出て、いわゆる護園（けんえん）学派を形成したことは良く知られています。著書は『論語徴』『護園随筆』晩年に八代将軍吉宗に献上した政治、経済、社会の問題点と対策について書いた『政談』等多数。

●菅甘谷（かん　かんこく 1690-1764）　**堀南嶠**

菅甘谷は大坂で始めて徂徠学を伝えた儒学者で、1690 年（元禄 3 年）岸和田藩士府川家に生まれている。名は晨耀、字は子旭、通称は小膳。幼い時から神童と言われ、父の友人の堀家の養子となり 250 石を給された。

江戸出府中に**荻生徂徠**の門下生となる。 徂徠は彼の才能を見抜き、経学と古文辞を徹底的に教授したと伝わる。

その後病気のため職を辞し大坂に移り、養家の堀氏の旧姓が菅原氏であったところから、一字をとって菅氏を名乗った。靭本町などで塾を開き以来、約 20 年間にわたり徂徠学を説いた。泊園書院に繋がる大阪における漢学の源流になったことが広く知られていなのは残念なことである。

甘谷の門下生には**田中鳴門**、**細合半斎**、**義端**、**岡魯庵**、**篠崎三島**、**藤川東園**、**兄（橋本）楽郊**、**葛子琴**、**片山北海**など多くの人材を輩出した。これらの人はいずれも詩文に長じ、後に「混沌社」の中心人物となっている。

その著書は少なく**篠崎小竹**が編纂した「**甘谷先生遺稿**」が知られていて今回は複製を展示しています。

●藤川東園（ふじかわ　とうえん 1739-1806）

大内郡白鳥の出身で父とともに大阪にいたが、のち高松市三谷町に来て東園塾を開き多くの弟子を持ち、医術、古文辞学を教える。

ここで学んだのが**中山城山**で京都に塾を開き、同じ高松出身の**藤澤東畝**や**相馬九方**が学び、後々の大阪における漢学の大きな潮流を形成することになる。

数多い門弟の中で師の**菅甘谷**の学風を伝える者は**釈義端**と**吉中元**だと言われます。この**吉中元**が東園です。その業績は不明な部分が多くその著作も伝わっていません。東園は字を子庸、号を崑崙といい**吉田求馬**と称した。師の教えを堅守して詩文をよくしたが後に讃岐に流寓して藤川氏に養われ改めて東園と号し医を業とした。

●中山城山（なかやま　じょうざん 1763-1837）

荻生徂徠を祖とする**藤川東園**を師として学んだ城山。このような讃岐の土壌の中でその学才が認められ高松藩国家老の大久保氏に招かれ家老の夫人に毛詩や国歌を教授した。

のち夫人の死によって国を離れ大阪京都長崎に遊学、京都に塾を開き同郷の**藤澤東畝**や**相馬九方**が城山を慕って研鑽を積んだ。文化 12 年（1815）53 歳の時子供に先立たれたあと郷里に帰り「全讃史」全 12 巻を実に 10 年余りをかけ　文政 11 年（1828）完結させ高松藩に献上している。**藤澤東畝**はこの「全讃史」の序文を書いている。これらはみな城山自身が讃岐の全域にわたって尋ね歩き実地踏査のうえでかき上げた労作であり今日の郷土史研究の貴重な書物となっている

城山の号は　生涯愛し続けたという坂出市府中の城山（きやま）からとったもの。城山の石碑が　坂出市高屋町の遍照院境内にあり城山に向かって建てられており、弟子**藤澤東畝**が撰文している。城山生涯の著作は　四七部　一二五冊に達した。

●春田横塘（はるた　おうとう 1768-1828）

岸和田の人。本姓は土生。名は有則。字(あざな)は有物。通称は仁左衛門、尚平。別号に海老。江戸の昌平黌で古賀精里に学んだ後、**甘谷**の教えを忠実に引き継ぐとされる**義端**に師事、後に土佐堀二丁目、伏見町などに漢学塾を開く。学識豊かで教授法に巧みだったため従学する者門にあふれたという。能書家としても知られた。書色紙二枚を展示します。名声は高く諸大名からの招聘もあったが仕官を好まず辞して応じなかった。晩年の岸和田藩からの招きには応じるを得ず大阪に留まりながら 2･3 ヶ月に 2･3 日藩校に出講するという条件であった。**中山城山**の朋友で、**篠崎**

小竹・頼山陽と親交があり、また篆刻・書をよくした。讃岐にいた藤澤東畝に来坂を勧め、開塾を支援したのがほかならぬ横塘であった。著書に「**袖珍唐明詩類函**」「横塘遺稿」詩集「古詩筌」「養生詩」など。篠崎小竹と一緒に天橋立勝遊をした際の紀行文「遊天橋記」も知られている。「**有慕集**」の複製を展示します。岡田玉山 編述・画、 岡熊岳・大原東野 画の「唐土名勝図会」の序文も横塘の作。

●**藤澤東畝**（ふじさわ とうがい 1794-1864）

讃岐・香川郡安原村で、農家の長男として生まれた。大坂で漢学塾「泊園書院」を開き、大坂を代表する学者・教育者となった。東畝の学統は長男の南岳(なんがく)、孫の黄鵠(こうこく)、黄坡(こうは)と受け継がれて発展し、泊園書院は幕末から明治・大正・昭和と政界、官界、実業界、教育界、学術、文芸など各方面で多彩な人物を輩出した。文政八年、三一歳の時、師・城山の朋友で、大坂の儒者・春田横塘の勧めで来坂し、大坂・淡路町御霊筋西で「泊園塾」（のちの泊園書院）を開いた。

嘉永 4 年、豊岡藩主・京極高厚の賓師（藩主に師として礼遇され講義を行う学者）となり、翌年には郷里・高松藩から大坂在住のまま士分に取り立てられた。また、尼崎藩最後の藩主・松平忠興も文久 3 年に入門している。

長崎留学をして海外事情にも明るく、若者にも慕われ、嘉永六年には長州藩士の吉田松陰が訪ねている。学風が硬直化した懐徳堂と比べ、評判が評判を呼び、門人は 3 千人を超える大坂最大級の私塾となった。

●**相馬九方**(そうま きゅうほう 1802-1879)

讃岐高松藩士の家に生れる。藤澤東畝とともに京都に出て中山城山に入門、徂徠学を学び修行を重ね、名を片山富五郎から相馬一郎に改めます。この頃蘭医新宮凉庭と知り合い、さらに凉庭の紹介で春日潜庵と交友を結びます。やがて四条室町に「立誠堂」の表札を掲げ、これを機に九方と号する。そこを訪れたのが後の池田草庵で、学僕として苦学の日々を過ごします。頻繁に出入りしたのが春日潜庵と森田節斉で同年代の 3 人は互いに切瑳琢磨する。他にも篠崎小竹・大塩平八郎・奥野小山・中林竹洞・中林竹渓らと盛んに交流します。嘉永 4 (1851)年、新宮凉庭の推挙によって岸和田藩に招かれ翌五年藩校講習館の開校とともに教授となる。岸和田藩は九方を館長とし、画人中林竹渓が補佐を務め、教授方は代々藩の儒家である三宅源之丞を筆頭に数名の儒者がこれにあたった。九方は多くの人材を育てるとともに、藩政に関与するようになりました。そうした立場からお家騒動に巻き込まれ、一時投獄されるという憂き目にもあいます。吉田松陰が岸和田を訪れた際には講習館で徹夜で議論を交わしたこともありました。

★**木活字版印刷**

平安・鎌倉時代には多くの仏典等が寺院等で印刷刊行されていましたが、秀吉の朝鮮出兵により李朝の銅活字による活字印刷がもたらされたことを切っ掛けに日本独自の木の活字が生まれ、印刷物が制作されるようになります。江戸初期に見られる木活字版は「**古活字版**」と呼ばれます。時代とともに販売目的に大量の印刷物を短期間に制作する必要が生まれ、印刷は活字版から整版と言われる一枚の板木に 2 頁分（1 丁）印刷する方式に移行し、活字版は影を潜めます。教育の普及により読み書きのできる人口が増大し仮名書きの読本が多くの職人の分業により効率的に制作されます。出版点数（冊数ではありません）でみると江戸初期には年間 100 点未満ですが末期には 800 点を超し、千点の年もあります。しかし漢文や学術書などは発行冊数も少なく高価であったため筆写本も多く作られ、流通している本の三分一に及んだようです。また個人や寺院、藩などが出した狭い範囲での私家版が二割強あって本屋などで流通させる目的で出版された「町版」は四割強という数字が出ています。

このように整版印刷で多くの本が流通するなかで江戸の末期に再び木活字版が出されるようになります。これはかなり趣味的なものと見られ、漢詩文を愛好する人達の自費出版に用いられたものが多く、その活字も次々と人手をわたっています。この時代の木活字本は「近世木活字本」と言われますが出版点数も少なく、印刷部数も少ないので一般にはあまり知られていません。そんな「**近世木活字本**」を制作したうちの一人が相馬九方です。

九方には兵法や漢詩についての著作もありますが、「**破レ家ノツツクリ話**（やぶれやのつつくりばなし）」等四種を木活字版で刊行しています。「破レ家ノツツクリ話」は鬼国山人（**新宮凉庭**）の著作で、経済にも明るく、諸藩の財政指導や融資を行なう一方、経済書も著します。この本の序文に九方は「頃日、聚珍版数万字を得、因って 50 本を榻写（とうしゃ）して、之を同士之士に贈る」と書いています。つまり、活字を入手して 50 部を印刷して配ったとあります。岸和田に来る 5 年前、弘化 3（1846）年と 4 年の 2 年間に、大阪に住んだ頃に活字を入手し印刷したもので、印刷したもので数種の異本が見られます。

★**岸和田藩のお家騒動について**

9 代藩主長慎（ながちか）が引退した後は長男の長和（ながより）が 10 代目を襲封するが在任 8 年 43 歳で病没する。11 代を継いだのは長和の末弟、南山公の六男・長発（ながゆき）で九方が岸和田藩に招聘されたのは彼の代であった。しかし彼も在任わずか 4 年余り、22 歳の若さで早逝してしまう。しかし彼の嫡男・長職（ながもと）は父の死の直後に生まれたこともあり長発（ながゆき）の兄（南山公の次男）長寛（ながひろ）が相続することになる。時に 47 歳。長寛は分家の岡部外記の養嗣子となり 3 千石の旗本として江戸城で中奥御小姓などを勤めていた。宗家に呼び戻されることになり正妻とその子を残し、側室と二児を伴って岸和田藩上屋敷に移った。そして長職を跡目に、自分は伯父として後見を届け出、弟の妻と長職は渋谷の下屋敷に移される。長寛の子長美（ながよし）と長職は同年の生まれでこのことが後々のお家騒動に繋がっていく。やがて隠退した後も藩内に目を届かせていた長慎が安政 5（1858）年に卒去すると長職と長美の跡目相続を巡って噂話が広がり始める。長職の毒殺計画が発覚。長職の母は一切の婦人の出入りを禁じ、亡き祖父南山公誠忠の志を側に置いて守らせ、食事もすべて自分の手作りとし疑わしき食材はすべて廃棄させたため食事を摂れない日もあった。江戸で生まれた長職はそのまま藩邸で育ち、9 歳で初めて藩地岸和田に入国。藩校『講習館』で**土屋弘**の教えを受けることになった。幼少時から神童として知られた土屋は当時 23 歳、藩校の『若先生』として知られており、岸

和田藩校の講師兼侍講として長職の教育に当たった。
　さらに二年後長美も岸和田に移り講習館に入門する。その際長寛が自ら長美の教育係を**九方**に依頼する。
　そのころ岸和田の実務を担っていた家老の岡部結城は「大倹約令」を出して不確かな時局を変動に備え、新しい政府の意向に則した対応が必要とする「勤皇」を主張、対して年寄、降屋宗兵衛は次期家老職を窺い、徳川への恩顧を捨て去るは武士道にもとるとして「佐幕」を主張。両派の対立に跡目相続の問題が絡みお家騒動に繋がっていくことになる。

★岸和田騒動、朝日新聞に連載される

　この事件は明治 16 年朝日新聞に「**椿説打岸波（ちんせつきしうつなみ）**」として挿絵つきの連載となった。はしがきとして「本日より端緒を開く一条の長物語は、此の浪華津に程近き泉州岸和田の旧城主岡部家の一大騒動にして事を徳川幕府の末、安政年間に起し、局を王政維新の昭代明治の初年、弾正台の審判に結び余波猶ひいて今日に及ぶ。其間、群小好悪を内にほしいまゝにして、忠臣之を外に憂ひ区々の心をつくし、けんけんの節を致して千酸万苦辞する所なく、終によく奸佞の毒銭を未然に制し、姦臣亡びて忠臣栄え忠邪曲直のあと長く世に明かに目出度、其大団円を見るに至る迄の事、怒るべきあり、悲しむべきあり、泣くべく笑ふべく、千状万態益々出でて益々奇なるは、彼の人口に?灸する、伊達、前田、鍋島、仙石、黒田諸家の騒動に勝るとも劣らざるべき稀世の活劇にして、然も事実は一々これを弾正台の審判書に微したるものなれば、多く其事実を誤らざるを信ずるなり、看官幸ひに文の粗にして、筆の至らざるを恕して、偏へに愛読の労を垂れ賜はんことをひねか翼ふになん。」とあった。そしてその小説の 12 回目のさし絵には相馬九方と降屋宗兵衛が密談するところが画がかれている。ところがその小説は旧岸和田藩士の連載中止運動によって十三回掲載されただけで未完となってしまった。13 回目の掲載がなされて後 2 日程して、この小説を中止するの断り書きが朝日新聞に掲載され「諸君の愛読を添なうせる続物語 椿説打岸浪 儀、旧岸和田藩知事東京府華族岡部長寛氏より誹毀の廉あるとて、当軽罪裁判所検事へ告訴され則係り検事補戸田荒太郎より口達を以て、取調中中止を命ぜられたれば、やむをえず其旨を奉じて一昨日限り謹で中止す」とある。　（註、椿説打岸波は明治 16 年 2 月 27 日より連載、**昔譚花散里（むかしばなしはなちるさと）**同年 3 月 17 日より連載いづれも掲載停止の要求に応じなかったのかどで同年 3 月 31 日朝日新聞編集署名人陶良平は禁固 5 ケ月罰金 15 円に科せられた当時世間を賑わした）

●土屋鳳洲（つちや ほうしゅう 1841-1926）

　岸和田藩士の長男。九歳で藩校講習館で、相馬九方に就いて荻生徂徠の古学を学び、19 歳で但馬の池田草庵に就いて朱子学や陽明学を学んだ。文久 3（1863）年、自ら異国へと飛び出すことを決意する。土屋は、上海に渡って文明開化の実態を見るため、九方の同意を得て長崎に向かうが、元治元年（1864 年）、米英仏蘭の連合艦隊による下関砲撃に遭遇し九州に渡ることができなかった。帰途、阪谷朗廬を訪ね、森田節斉の塾にとどまって篠崎小竹・森田節斉に学んだ『馬関日記』。のち、九方の婿養子となり九方の後を受けて教授となります。しかし、お家騒動に巻き込まれ九方が獄に繋がれ、弘も詮議を受けます。このこともあって土屋姓に戻ります。のちに鳥羽・伏見の戦いには軍事奉行となり、藩校講習館の教授となります。維新後は、奈良師範学校長、華族女学校教授、東洋大学教授などを歴任します。東京の二松学舎や斯文会・弘道会においても貢献しました。
　堺市戎之町の自宅に晩晴塾を開き、そこで漢籍・詩文、修身を教えました。鎖国状態のチベットの首都ラサに到達し貴重な資料を持ち帰るなどして、チベットとの交流の先鞭をつけた河口慧海もここで学びました。
　彼の漢詩文はすこぶる多く、出版物の序文や碑文など多岐にわたります。岸和田城の大手門を入った正面にある岸和田城址碑の文章も土屋弘の撰になるものです。それらの詩文を集めた「晩晴楼文鈔(ばんせいろうぶんしょう)」「晩晴楼詩鈔」を始め 58 巻を著しています。それら著作物も初期は木版・和装本で、活字和装本、さらに洋装版へと変化しています。まさに出版界も明治から大正へと大きな変革期を迎えていた様子が伺えて興味深いものがあります。「文家金丹（ぶんかきんたん）」を晩晴舎刊として明治 13 年に、また師である相馬九方の著作「立誠堂詩文存（りっせいどうしぶんそん）を 晩晴書院版として明治 18 年に刊行しています。「人之基（ひとのもとい）」「書法略解（しょほうりゃっかい）」「人體問答圖解（じんたいもんどうずかい）」など教科書としての著作も多くあります。
　展示の条幅には、「大正五年一月十四日　詔講尚書於宮中」とあり、宮中の新年の儀式で、皇族が学者を宮中に召して、御学問所で進講を受ける講書始（こうしょはじめ）の進講者として参内した時のものです。

●池田草庵（いけだ そうあん 1813-1878）

　文化 10 年に兵庫県養父郡八鹿町の農家に生まれます。広谷村にある満福寺という寺院で出家し、一七歳のとき、広谷村に滞在していた京都の儒学者、相馬九方の講義を受けます。そこで自分の進むべき道は儒学を学ぶことだと確信。天保元年（1831）に 19 歳で上京し、京都の相馬塾に入門しました。雑用をしながら勉学に励み、一年足らずで塾頭になります。この頃春日潜庵（かすがせんあん）と知り合い、23 歳の夏には相馬塾を去り、松尾神社の草庵を借りて読書思惟に没頭します。そして草庵の号を使うようになります。
　天保 11 年に京都一条に塾を開きますが、14 年には郷里からの懇願によって八鹿に帰り立誠舎という塾を開きます。しかし弘化 4 年、35 歳の時には宿南に青谿書院（せいけいしょいん）を建てます。ここで、終生自分の学問と修養につとめました。草庵のもとには林求馬や、土屋鳳洲、京極武等が入門します。晩年、豊岡藩や福知山藩等にたびたび出講して多くの人材を育て但馬聖人と呼ばれました。

●森田節斎（もりた せっさい 1811-1868）

　勤皇派の儒学者、大和五条（奈良県）の医家に生まれる。京都で猪飼敬所および頼山陽に学び、さらに昌平黌に入って安井息軒らと知りあう。のち京都で相馬九方や春日潜庵と盛んに交流する。塾を開いて尊王攘夷を唱え吉田松陰、

乾十郎ら尊攘志士を輩出し、文名一時に揚がった。東畩は節斎の紹介で松蔭に会っている。また頼三樹三郎、梅田雲浜、宮部鼎造らと親しく交わる。節斎は、文学や政治だけでなく、実業界の人々にも大きな影響を与えていたらしい。文久元(1861)年倉敷に移り、倉敷紡績の創業者である大原孝四郎の父壮平は、当時倉敷に塾を開いていた節斎から「謙受」の精神を教えられた。勤皇運動で幕府に目をつけられたため、紀伊国に逃れ髪をおろし愚庵と号し、那賀郡荒見村（粉河）に没す。著書に『節斎遺稿』二巻がある。節斎の妻は泊園書院で学んでいた小倉節子で、号は無弦。間を東畩がとりもった。節子は幼時に疱瘡を患い、容貌醜黒だったが、学問・詩才にめぐまれた賢女であった。南岳に「祭節斎森田先生文」(『七香斎文雋』所収）がある。

●春日潜庵(かすが せんあん 1811-1878)
幕末維新期の勤王儒学者。公卿久我家の執事となり、久我建通のもとで活動。安政の大獄に連座、後、西郷隆盛、大久保利通と交遊、奈良県知事となるが、幕府通謀の疑いで投獄、辞官。
師事したのは佐竹重政(読書・書道)五十君南山(儒尚子)鈴木遺音(崎門学)佐藤一策。往来したのは馬来南城・相馬九方・吉村秋陽・山田方谷・池田草庵・森田節斎・川田観平・中島衡平・上原立斎・上甲禮三・梁川星巌・横井小楠・西郷南洲・枝吉平左衛門・松浦武四郎・島圃右衛門・橋本左内等。書簡を応酬したものに林良粛・大塩平八郎など。尊王援夷運動の震源地で久我通久家の家政を取り仕切り、孝明天皇に信認された。春日潜庵の政治活動は目を見張るものがある。間もなく政治向きの働きからは身を引くことになり、隠棲して学問に専念し後進の育成に携わる。
相馬九方が投獄された際には西郷隆盛と計らって牢から出すことに尽力した。

●新宮凉庭（しんぐう りょうてい 1787-1854）　江戸時代の蘭方医。丹後国由良出身。家が貧しかったため、漢方医の叔父の元で育つ。幼いころから記憶力に優れた秀才で、漢学を修める。16 歳で福知山藩の江戸藩邸に詰め、18 歳のときに故郷で漢方医として開業する。21 歳のとき、西洋医学を学ぶことを決心し、長崎に向かって旅立つ。道中、各地の医学者を訪ねては交流して学び、3 年後に長崎へ到着。カピタンに気に入られ、出島の商館医との交流が許され、自らも医師として商館で働いた。1818 年に故郷に戻り、翌年に京都で開業、多くの弟子を育てた。経済的にも成功し、1839 年に医学学校と文化サロンを兼ねた「順正書院」を南禅寺の隣に建てた。相馬九方の師中山城山と親しく、城山の紹介で九方との交流が始まる。経済にも明るく、盛岡･南部藩から藩財政再建につき助言を求められた際には九方も同道して献策。経済書「破レ家ノツツクリ話」を著し九方が木活字版で出版。凉庭の仲立ちで九方が禁裡の御殿医横井俊輔の娘を娶った。儒者として九方を岸和田藩へ紹介して藩校教授への道を開いた。

●阪谷朗廬（さかたに　ろうろ、1822-1881）
江戸末期は教育者として、明治維新後は官吏としても活動した。東京学士会院議員。諱は素（しろし）、朗廬は号である。幼名は素三郎、通称として希八郎も用いた。
1822 年、備中国川上郡九名村（現在の岡山県井原市）で、代官所に勤めていた阪谷良哉の三男として生まれた。6 歳の時に当時父親が勤務していた大坂へ移り、最初に奥野小山、次いで大塩平八郎のもとで学び、ここで才能を見出された。11 歳で江戸に移転し、朱子学者の昌谷碩（精溪）に入門した。さらに 17 歳で古賀侗庵に師事した。26 歳の時、病床にあった母親の世話をするため帰郷する。
1851 年、伯父で蘭学者の山成奉造（山鳴大年）の協力により、実家の九名村から少し離れた簗瀬村（現在はともに井原市の一部）に桜渓塾を設立する。1853 年には代官所が郷校として興譲館（後の興譲館高等学校）を設立するにあたり初代館長に就任するなど、地元で後進の指導にあたった。1868 年に広島藩から藩儒、藩学問所（現修道中学校・修道高等学校）主席教授として迎えられるが、1870 年に廃藩置県で辞職する。1871 年には再び東京に転居し、明治政府の陸軍省に入省する。その後文部省、内務省などの官職を歴任した。また福沢諭吉らとともに明六社に参加、唯一の儒学者として活動した。1879 年には東京学士会院議員に選出された。

●谷　三山（たに　さんざん 1868-1802）
名は操、字は子正また存正、幼名市三、通称新助のち昌平。三山、釈斎、淡庵、淡斎、無耳山人などと号した。大和八木の出身、三山は耳が不自由で十代でほぼ聞こえなくなり、さらに幕末には目も見えない状態になりました。日常の仕事をすることが難しかったのですが、家が豊かであったお陰で、読書三昧の毎日を送ったといわれています。学問についてはほとんどが独学で、中国の儒学・歴史書、日本の歴史書、ペリー来航の前には当時の欧米列強諸国のありようなど海外事情について記された書物も読んでいて、大変視野が広かったといえます。稀代の集書家として知られ豊かな蔵書が彼の独学のバックボーンとなりました。
天保 6(1835)年ごろ家塾「興譲館」（こうじょうかん）をおこし門人多数におよんだ。15 年 1 月高取藩(奈良県)藩主植村家により儒臣に抜擢され士籍に列した。その学問は経世に志あり、また藩政や尊王攘夷、あるいは山陵修復についてなど、たびたび上書した。大和の儒者森田節斎や吉田松陰が教えを請うたこともありましたし、松浦武四郎（「北海道）の命名者）も訪れています。当時の一流の学者たちにも一目おかれた人物でした。
吉田松陰は、谷三山との筆談の中で海外の事情をきちんと認識する必要があるということを悟ったのではないか、また三山の言葉に大いに刺激され、海外に渡りその事情を自分の目でみたいと強く思うようになったのではないか、つまり谷三山が吉田松陰の活動に大変大きな影響を与えたのではないかと思われます。
安政 6 年（1859）吉田松陰が処刑される。三山は松陰の死を悼み 12 月 14 日、松陰の四十九日の忌日に追悼会を催す。参会者は相馬九方、森田節斎、藤澤東畩、篠崎小竹、山田文英、斉藤拙堂、伴林光平、後藤松陰、宮部鼎蔵、足代弘訓等

●吉田松陰（よしだ しょういん 1830-1859）
文政 13 年 8 月 4 日生まれ。杉百合之助(ゆりのすけ)の次男。杉民治の弟。長門(ながと)(山口県)萩(はぎ)藩士。山鹿(やまが)流兵学師範の叔父吉田大助の仮養子となり、兵学と経学をまなぶ。9 歳のときから藩校明倫館で山鹿流兵学を教授。嘉永 3 年から諸国を遊学して会沢正志斎、安積艮斎(あさか･ごんさい)らに従学。6 年から佐久間象山に砲術、蘭学をまなぶ。7 年下田沖のアメリカ軍艦で密航をはかるが失敗。幽閉された生家に、安政 4 年松下村塾(もとは外叔父玉木文之進の家塾)をひらき、高杉晋作、伊藤博文らを指導するが、安政の大獄で 6 年 10 月 27 日刑死した。30 歳。名は矩方。通称は寅次郎。別号に二十一回猛士。
★吉田松陰の来訪
平戸、長崎、江戸、東北、近畿を訪ねて著名な学者などに会い、見聞を広げることにつとめていた吉田松陰は、東北で行動を共にした安芸五蔵（あきごぞう 森田節斎の門人）の紹介状を携えて、嘉永 6 年（1853 年）2 月 13 日に森田節斎を訪問し、5 月 1 日まで儒学や歴史などについて討論した後、谷三山の門弟のひとりで『孫子』（中国の兵学の書）に通じていた田井庄の森鉄之助を訪れ、その紹介で 5 月 2 日に、鉄之助の子供に導かれて八木の谷三山を訪れることになりました。
森鉄之助が三山のすぐれた学説を語ったところ、松陰は手を打って「妙」と感心し、請うての訪問であったと考えられます。鉄之助は吉田松陰を「篤実な人物で学問をしこれを実際に役立てる志を持っているので、快く応じてやってほしい。」と三山に紹介しています。二人のやりとりについては資料が残っていませんが、対外策や儒学について筆談したのではないかと思われます。
谷三山に教えを請うてからの吉田松陰の行動をみると、長崎に下りロシアの船に乗って海外に渡航しようとし、翌嘉永 7 年にも下田でアメリカの艦船に乗り海外に行こうとしましたがこれを果たせず、結局自首するにいたっています。
「大和の八木に 谷三山という学者がいる。この人から聞いたことは、思い出すたびに、新しい発見がある。(吉田松陰)三山は松陰に由って、関西志士の間に紹介せられ、 関西域は長藩に游ぶ者高取藩と言はずして三山の郷里を以て名乗りしことを伝ふるものすらあり。(『通俗教育逸話文庫志士の巻』)

●篠崎小竹（しのざき しょうちく 1781-1851）
本姓は加藤氏。幼名は金吾、名は弼（たすく）、字は承弼、小竹は号で別号に畏堂・南豊・聶江（しょうこう)・退庵・些翁などがある。通称は長左衛門。天明元年（1781 年） 、豊後国の医師・加藤周貞の次男として大坂に生まれる。
9 歳で篠崎三島の私塾梅花社に入門し、古文辞学を受ける。三島に後継ぎがなく 13 歳の時に望まれて養子となる。しかし、江戸幕府による寛政の改革が進む中、頼山陽に感化されると養家を抜け出し、江戸に遊学。尾藤二洲に学び古賀精里の門をくぐって朱子学者に転向する。その後、養父・三島に詫びて和解がなり、梅花社を継いでいる。三島にも勝って塾は栄え、多くの門弟を育てた。
詩・書に優れ、書籍を刊行しようとする者のほとんどが小竹に序・題・跋などの文章を求めるほど人気があった。温厚で社交好きな性格だったこともあり、関西学芸界の名士となった。頼山陽とは、養父・三島が菅茶山と悶着のあった春水の長子・山陽を預かることとなり、小竹はすぐさま山陽の才能を見抜き、茶山との間柄を取り持ち常に山陽を擁護した。嘉永 4 年（1851 年)、死去。享年 72。大坂天満天徳寺に葬られた。

●後藤松陰（ごとう　しょういん　1864-1797）
江戸後期の儒学者。美濃(岐阜県)生まれ。名は機、字は世張、通称は俊蔵。号は松陰、春草、鎌山、兼山。幼くして神童と称され、大垣の菱田毅斎に学んでその塾長となった。文化 12(1815)年から頼山陽に師事、文政 1(1818)年、山陽の西遊に随行した。3 年大坂に塾「広業館」を開き、8 年山陽の媒妁によって篠崎小竹の娘町子と結婚。当時大坂で、文は松陰、詩は広瀬旭荘と並称された。
吉田松陰、後藤松陰を訪問
吉田松陰著の「癸丑遊歴日録」によると嘉永 6 年（1853）1 月 11 日には、大坂梶木町の後藤春蔵（松陰）を訪れたことが記載されています。
「十一日（途中省略)。後藤春蔵を梶木町に訪ひ、一見して及ち出で、舟に還る。(以下省略)」
吉田松陰はその後、五條の森田節斎を訪ね、岸和田などを遊歴の後、再び 3 月 18 日に大坂へ戻ります。しばらく記録が途絶えていますが、4 月 1 日と 3 日、再び後藤松陰を訪ねています。
「4 月朔日　晴。後藤春蔵・藤澤昌蔵（即ち東畩なり、高松）を訪ふ。2 日　晴。坂本鉉之助・奥野彌太郎（遠藤但馬守の臣）を訪ふ。3 日　晴。後藤春蔵を訪ふ。(以下省略)」

●大塩平八郎（おおしお へいはちろう 1793-1837）
江戸時代後期の儒学者、大坂町奉行組与力。大塩平八郎の乱を起こした。
通称は平八郎、諱は正高。字は子起。号は中斎。家紋は揚羽。大塩家は今川氏の末流で、代々大坂東町奉行組与力を務めており、平八郎は初代の大塩六兵衛成一から数えて 8 代目にあたる。大坂天満に生まれた。
奉行所時代は、組違いの同僚である西町奉行与力・弓削新左衛門の汚職を内部告発するなど、汚職を嫌い、不正を次々と暴いた。奉行所内では大塩を疎む者もいたが、上司の東町奉行・高井実徳が大塩の行動を後押しした。
文政 13 年（1830 年）の高井の転勤とともに与力を辞し、養子の大塩格之助に跡目を譲った。学問は陽明学をほぼ独学で学び、隠居後は学業に専念し、与力在任時に自宅に開いていた私塾・洗心洞で子弟を指導した。
天保 7 年（1836 年）秋から同 8 年（1837 年）夏にかけての大飢饉は特に酷かった。
大坂東町奉行にさまざまな献策を行ったが、全く聞き入れられず、豪商への依頼も奉行の指示で断られたため

流民は大坂に流れ込み、大坂市中の治安は悪化した。
天保 8 年（1837 年）2 月に入って、**蔵書を処分するなどして私財をなげうった**救済活動を行うが、もはや武装蜂起によって奉行らを討ち、豪商を焼き討ちして灸をすえる以外に根本的解決は望めないと考え、天保 8 年 2 月 19 日（1837 年 3 月 25 日）に門人、民衆と共に蜂起する（大塩平八郎の乱）。しかし、同心の門人数人の密告によって事前に大坂町奉行所の知るところとなったこともあって、蜂起当日に鎮圧された。
平八郎は潜伏先で役人に囲まれる中、養子の格之助と共に短刀と火薬を用いて自決した。
文政 12 年頃より相馬九方とも親交を結んでいて、この事件に関わって九方も詮議を受けることになったが「大塩平八郎に与うる」という論稿があったことによって難を逃れるされる。

●藤澤南岳（ふじさわ なんがく 1842-1920）
藤澤東畝の長男。名は恒、字は君成、通称は恒太郎。号は醒狂、香翁など。讃岐（さぬき）高松藩士。弘化 3 年（1846）尼崎藩の儒官をつとめる。慶応元年（1865）24 歳にして父のあとを嗣いで泊園塾を運営し、父と同じく大阪在住のまま高松藩儒官となる。戊辰（ぼしん）戦争では佐幕派だった高松藩の藩論を一夜で朝廷派へと変換し藩の危機を救う。戊辰戦争後、藩の保全に尽力、藩学講道館にて督学を勤める。明治六年大阪に戻り父の泊園書院を再興し、数千人の門人を擁し大阪でも最大級の漢学塾として多くの人材を育成した。土屋鳳洲の親友で、南岳・阪本葵園と「歳寒社」を結成する。著作に「自警蒙求」「七香斎文雋」「増註十八史略定本」などがある。
「通天閣」や「寒霞渓」の命名者であり、大阪市内の精華小学校・集英小学校・愛日小学校・桃園小学校・愛珠幼稚園・（神戸市立）好徳小学校も南岳が命名した。
展示の「評釋　純正蒙求箋本　上・中・下」三冊は南岳が著し土屋鳳洲が注釈を付けて出版されたもの。

●藤澤黄坡（ふじさわ こうは 1876-1948）
南岳の次男、父に漢籍を学び、東京高等師範学校を卒業。帰阪して明治 40 年から 44 年（1907-1911）まで岸和田中学（現在の岸和田高校）に国漢学を講じます。『岸和田高等学校の第一世紀』には、在任中の逸話として、黒紋付きの羽織袴姿、上方落語のような名調子の授業であったと書かれています。
明治 44 年、同中学を辞し、泊園書院分院を開きますが父の南岳が亡くなり、兄の黄鵠が引退した後はここが本院となります。大正 11 年に関西大学予科講師に就任、その後、教授となり、定年後も引き続き非常勤で教鞭を執ります。昭和 23 年 11 月に没し、泊園書院は幕を閉じます。泊園書院の建物は戦災で焼失しますが、その蔵書や収蔵品は幸いに戦禍を免れ、昭和 26 年（1951）黄坡の子の藤澤桓夫から関西大学図書館に「泊園文庫」として一括寄贈されました。
黄坡は詩吟を愛好し、昭和 9 年（1934）年、詩吟の会を創設し、現在は「関西吟詩文化協会」となっています。

●河口慧海（かわぐち えかい 1866-1945）
現在の堺区北旅籠町西に生まれました。清学院で行われていた寺小屋、錦西小学校、土屋鳳洲の晩晴塾、東京の哲学館（現、東洋大学）に学びました。慧海は、チベット語訳の仏教原典を求めて明治 30 年および 37 年の二回にわたり鎖国状態のチベットへ入国、その旅行記（『西蔵旅行記』）は、仏教学者だけではなく民族学者、探検家にも高く評価されました。晩年、慧海は僧籍を返上し、在家の立場で仏教の研究や普及につとめ、また大正大学教授としてチベット語の研究に専念しました。通算 17 年間のチベット行の際に、慧海によって収集されたインド、ネパール、チベットの仏教美術資料、民俗資料、標本、合わせて 1486 点が「河口慧海コレクション」として慧海の遺族から東北大学に譲渡され、保管されています。令和 5 年 8 月から 10 月まで東京国立博物館で**「日本初のチベット探検―僧河口慧海の見た世界―」**が開かれました。また同じく令和 5 年 9 月から 10 月に堺市立博物館で企画展**「河口慧海 仏教探究の旅」**が開催されました。河口慧海のたどったルートを 30 年かけて解明したノンフィクション**「求道の越境者 河口慧海チベット潜入ルートを探る三十年の旅」**根深誠著、2024 年 2 月中央公論新社刊

●藤澤桓夫（ふじさわ たけお 1904-1989）
黄坡の長男として明治 37 年に生まれる。旧制大阪高校在学中より『猟人』『龍舫（りゅうほう）』などの同人誌で習作を発表する。『辻（つじ）馬車』に掲載した『首』が横光利一、川端康成に認められて文壇に進出した。東京帝国大学に進んでからは新人会で活躍します。大阪に戻り、『花粉』『新雪』などの評判作を書き、関西を代表する作家となります。終生住吉に住み続け、織田作之助、司馬遼太郎、田辺聖子はいずれも桓夫の薫陶を受けています。
父が岸和田中学に勤務した期間を岸和田市で過ごしますが、この頃のことを振り返って『大阪自叙伝』で次のように述懐しています。『数え年で八歳の春まで岸和田で過ごしながら、岸和田時代のことを殆ど憶えていない。ただ残っているのは、瞬間的な場面の記憶である。【中略】私に幼時を思い出させる景物は何一つなかった。」また、サンケイ新聞の若き文化部員だった司馬遼太郎が、社用で藤澤桓夫の書斎に顔を見せていた頃に短編小説の募集に応募した話などの興味深いエピソードも綴られています。

●司馬遼太郎（しば　りょうたろう 1923-1996）
日本の小説家、ノンフィクション作家、評論家。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章受章者。本名は福田定一（ふくだ ていいち）。筆名の由来は「司馬遷に遼（はるか）に及ばざる日本の者（故に太郎）」
産経新聞社記者として在職中に、『梟の城』で直木賞を受賞。歴史小説に新風を送る。代表作に『竜馬がゆく』『燃えよ剣』『国盗り物語』『坂の上の雲』などがある。『街道をゆく』をはじめとする多数の随筆・紀行文などでも活発な文明批評を行った。

★司馬遼太郎についてのエピソード

①サンケイ新聞の若き文化部員だった司馬遼太郎が、社用で藤澤桓夫の書斎に顔を見せていた頃のことでした。あるとき「ちょっと小遣いが欲しくなったので、小説をひとつ書くことにしました」と私（藤澤）に告げた。当時の司馬君は無論無名で、私の知る限りではまだ小説も書いていなかった。司馬君の説明によると、当時講談社から出ていた「講談倶楽部」が、五十枚程度の短編小説の募集の発表をした。その 1 等賞金が 15 万円だったか 20 万円だったか、それ頂戴することにしたと、司馬君は書く前に既にもうその賞金を貰ったようなことを言うのである私は彼の顔を見直した。有名誌の作品募集であるから、無論応募者は数百人、数千人あるだろう。その中には、筆力十分なセミプロ級の作家達もたくさんいるだろういくら司馬君が才気煥発の青年で、自分の筆に自信を持っていても、そうは問屋が卸すまい。殊に短編の場合は、キワ物的な海外物など、題材の今日的な特異性だけで一位になれる作品が現れる可能性も強い。が、司馬君の表情はむしろ楽天的なまでに明るかった。私は、司馬君の小遣い稼ぎの計画が成功することをのぞみつつも、まあ大体アカンやろうなと考えていた。それから二三か月して、出版社から月づき贈ってくれていた「講談倶楽部」が届いたので、私は当選者発表の頁を繰って見た。それから、あっと言った。第一位は、司馬遼太郎作「ペルシャの幻術師」だったのである。司馬遼太郎が第 8 回講談倶楽部賞を受賞したのは 1956 年（33 歳頃）、このときの小遣い稼ぎの応募が文壇デビューへと繋がったのでした。（藤澤桓夫著「大阪自叙伝」より）

② 42 年に東洋学者の叔父、石濱純太郎を題材にした「新雪」を発表。司馬遼太郎はこの小説を読んで、東洋言語学者に憧れ、大阪外国語学校（現大阪大学）のモンゴル語の学科を志したという。

③石濱恒夫が大学在学中に学徒出陣で召集され、陸軍戦車学校に入り、戦車部隊配属となる。見送りに来ていた藤澤桓夫と司馬遼太郎が初めて顔をあわせる。（藤澤桓夫の葬儀に際しての司馬遼太郎の弔辞）

●石濱純太郎（いしはま じゅんたろう 1888-1968）

黄坡の妻の弟、泊園書院（現・ 関西大学）を経て、東京帝国大学卒。東洋の古語と西域出土の仏典、古文献の研究者として活動した。大阪外国語学校（のちの大阪外国語大学。現大阪大学外国語学部）で結成した大阪東洋学会を、1927 年（昭和 2 年）にニコライ・ネフスキー、高橋盛孝、浅井恵倫、笹谷良造らとともに発展させ「静安学社」に改名。静安学社の名は、結成直近に亡くなった西夏学者王国維の字の静安からとったものであった。西夏語を研究を始める。龍谷大学講師を務め、また関西大学では助教授、教授（1949 年就任）を務めた他、1953 年には日本西蔵（チベット）学会会長に就任。1957 年「支那学論攷」で文学博士号が贈られる。1959 年、関西大学教授を定年により退任、名誉教授に就任。大阪府立市岡中学校（旧制中学校。現・大阪府立市岡高等学校）で画家の小出楢重、作曲家の信時潔と同級。作家の織田作之助とは長年に亘り親交が深かった。4 万冊を超える東洋学関係の蔵書は、大阪大学に「石濱文庫」として保存されている。著書に「浪華儒林傳」がある。

泊園書院の蔵書は戦後、石浜純太郎の仲介で関西大学に寄贈され、その人文学とアジア学の礎となる。

●石濱恒夫（いしはま つねお 1923-2004）

大阪市出身。父は歴史学者（東洋史学）の石濱純太郎。従兄に小説家の藤澤桓夫がいる。

大阪高等学校（旧制）を経て、東京帝国大学文学部美術史学科在学中から父の友人であった織田作之助などの影響を受けて文学を志し、大学卒業後に藤澤桓夫の紹介で川端康成に弟子入りし、鎌倉の川端の私邸に住み込み師事した。1968 年（昭和 43 年）に川端がノーベル文学賞を受賞した際には、ストックホルムでの授賞式に同行している。

また、大学在学中に学徒出陣で召集され、陸軍戦車学校に入り、戦車部隊配属となる。その部隊で一緒だったのが司馬遼太郎であり、石濱と司馬はこの時以来、司馬が亡くなるまで親交が深かった。1946 年に文学同人誌『文学雑誌』に参加し、小説家としての活動を始める。1953 年に発表した「らぷそでい・いん・ぶるう」が芥川賞候補となった。歌謡曲の作詞も手がけ、地元大阪を舞台とした数々のヒット曲を世に送り出した。テレビドラマの脚本も数多く手がけた。

●福井楠喜（ふくい くすき 1856-1934）

安政 3(1856)年に岸和田藩士福井興堂の子として生。楠之丞を 13 才で楠樹と改めのち楠喜と改称、幼時より学に秀れ、土屋鳳洲に学び、備中の興譲館で阪田朗廬の甥･阪田丈平（号警軒）の門に入り、明治 16 年、東京二松学舎の三島殼に学ぶ。明治 19 年 4 月、大阪で私塾豫章(予象)館を創立して子弟の教養に尽し、先代没後岸和田に帰郷して岸中の教鞭（1899-1907、1911-1916）をとった。昭和 9 年 10 月、77 才で没す。泉州に漢学と書で多くの門下生を持ち、なかに濱田耕作(青陵)がいる。泉南各地に碑文や額（岸和田神社扁額）を残す。

●濱田青陵（はまだ　せいりょう 1881-1938）

岸和田藩の藩士である濱田家の長男として生まれた。明治 26 年（1893）大阪淡路町に元岸和田藩士福井楠喜(豫章)が開いていた私塾豫章館に入ります。翌年には和泉三帝陵（仁徳・履中・反正三帝の陵）をめぐって「山陵図志」の編纂を計画するなどこの頃から考古学への興味を抱いていました。

明治 27 年大阪府第一尋常中学校（現：北野高等学校）に入学するが、放校処分となり、その後東京府に渡り早稲田中学校（現：早稲田中学校・高等学校）に転校する。さらに、第三高等学校（現：京都大学総合人間学部）を経て、東京帝国大学で美術史を専攻し、1905 年に卒業。その後、ヨーロッパに留学して考古学の研究を続ける。帰国後は京都帝国大学考古学研究室の初代教授に就任。1918 年には文学博士の学位を授与される。『通論考古学』で「考古学は過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究する学」と定義した。この書物は考古学の教科書として長く親しまれ、日本考古学の水準を高め、普及にも役立った。

1937 年には京都帝国大学の総長に就任した。1938 年春、病気になり、京都帝国大学医学部附属病院に入院、7

月 25 日萎縮腎から尿毒症を併発して急死した。彼の名をとって、優秀な考古学・歴史・美術などの研究に功績を残した人物に授与される濱田青陵賞が、1988 年に岸和田市と朝日新聞社の共催により設けられている。

●華岡青洲（はなおか　せいしゅう　1760-1835）
宝暦 10 年（1760）に紀ノ川中流域の那賀郡那賀町に生まれる。代々医者の家系であったため、父のもとで医学を学んだ。天明 2 年（1782）から 3 年間京都に遊学し、寝食を忘れて古医方、オランダ医学系統の外科学や儒学を学ぶ。この遊学時代に麻酔剤「麻沸散」を使って開腹手術をした古代中国、三国時代の医師、華佗の存在を知り、青洲は日本の華佗になることを決意する。
当時切除により初期乳癌が治癒するという考え方は専門家の間にあったが、患部の切除手術には患者を無意識、無痛の状態にする必要があった。京都から帰郷した青洲は診療のかたわら麻酔剤の研究に努める。長年にわたる研究過程で、この当時としては新しい「実験」という手法を繰り返し、動物実験の成功後、自らの大切な妻と母を被験者として実験をおこない、曼陀羅華を主成分とする麻酔薬「通仙散」を完成させる。なお、このエピソードについては、有吉佐和子により 『華岡青洲の妻』として小説化、劇化され、よく知られているところである。青洲は帰郷 19 年後の文化元年（1804）に、老婦人の全身麻酔による乳癌手術に成功する。アメリカ人医師モートンによるエーテル麻酔の成功に先立つこと 40 年余の快挙であった。このニュースは華岡流医学として全国に伝わり、1800 人を超える医師達が青洲の門を叩いたといわれる。
地元では青洲の生家であり、病院・医塾であった「春林軒」が移築・復元されるとともに、「青洲の里」として整備され、数多くの遺品を展示し、彼の業績を紹介している。

●華岡鹿城（はなおか　ろくじょう　1779-1827）
華岡家は代々在村の専業医で、父直道は大坂で南蛮流外科を学び、兄青洲（1760 － 1835）は全身麻酔薬「通仙散」を開発し、世界で初めて全身麻酔による乳がんの手術に成功しました。鹿城は歳の離れた末弟で兄同様「通仙散」による麻酔を行いました。
鹿城は兄の意を受け、1811 年ごろ堺の少林寺町で診療所を開きました。1816 年には大坂中之島に移り、春林軒の分塾を開設し「**合水堂**」と名付けました。大坂への進出は華岡流外科を広め安定的に入門者を確保するのが目的でしたが、その目的通り堺の診療所開設の頃から合水堂には多くの人が学びに来ました。西洋医学が本格的に入ってくるまで、わが国の医学の発展に大きく貢献した医学専門塾であったわけです。平成 27 年には、大阪市北区中之島 1 丁目 1 番地、大阪市中央公会堂の前に合水堂顕彰碑がたてられ、「合水堂は幕末まで大阪の中心にあって多数の医学生を育成したが、忘れられようとしている」と顕彰碑建立の意義が説明されました。

●山田文英・山田松軒・松堂
山田文英は、諱（いみな）を克、字を子復、号は東山で、文英は通称。山田氏は代々広瀬藩に仕え、文英は江戸四谷に生まれる。武をたしなみ、経書に接し、史書を学び、頼山陽をしたって上京するも、山陽はすでに没していた。のち、紀北に赴き、林南渓（通称、華岡随軒 1760-1785）についた。随軒は、華岡青洲の通称。紀州侯の侍医に準じる文英は、紀州侯の病を治し、名声があがる。また、時局を非難した森田節斎をかくまった。
「泉州史点描」（冠　豊一著、近畿出版印刷）によると、明治 4（1871）年、土屋鳳洲（28 歳）が会った時、山田文英は 64 歳でまだかくしゃくとして、鳳洲をみると喜んで、家人に酒肴をととのえさせたという。
青洲の門下生、山田文英の長男の松軒は、岡田浦にて暮らしたが、45 歳で病にて急逝。次男山田松堂は、大坂で発行された医師番付に、『山田連、漢方、ない科・外科、淡二』とあり、淡路町２丁目に在住。
★吉田松陰宿泊の地　山田文英邸(山田家)
嘉永 6 年（1853）2 月 26 日泉州岡田浦から山田文英が、岸和田滞在中の松陰を訪ね会談しました。
3 月 3 日に岸和田を発った松陰は、3 月 5 日、泉州岡田浦の山田文英の邸を訪ねました。5 日から 17 日の 13 日間、山田家に滞在しました。松陰は「発丑遊歴日録」に山田文英のことを次のように記載しています。
二月二十六日（前文省略）　山田文英なる者は雲（州）※現在の島根県の人なり。泉（州）の岡田に来り醫（医）業とす、亦来りて一宿す。
三月五日　　熊取を発し、岡田の山田文英の家に至る。行程二里。岡田は一漁村なり。文英の門生に西川俊齋と云うものあり、紀の人なり。

●岡野半牧（おかの はんぼく 1848-1896）
大阪で初の文芸雑誌『なにはがた』の編集発起人。小説家として知られる。貝塚生まれ、名は武平、別号は桐廼舎鳳居・一丘庵。生来文筆・学問を好み、津田貞を主筆に『朝日新聞』が創刊された時に誘われて家業を辞めて参加する。そこで知り合った西村天囚・本吉欠伸・堺利彦・渡辺霞亭・長野圭円・久松澱江らと「浪華文学会」を結成、機関紙『なにはがた』を発刊した。これをきっかけ「芦分船」「大阪文芸」「浪花文学」などの文芸誌が次々誕生した。半牧は『芦辺の鶴』『みやこ紅』『三花菱』『浪華五人男』などの人気作を次々と発表する。
明治 16 年には朝日新聞の連載小説として無署名ながら岸和田のお家騒動を題材とした「**椿説打岸波**」の連載を開始、岡部氏からの抗議もあって 2 月 27 日から 3 月 15 日までの期間で連載は中止された。続けて 3 月 17 日から連載の始まった「**昔譚花散里**」も 3 月 21 日で連載中止となっている。
「昔譚花散里」も舞台を「いづれの国いづれの處を詳らかにせざれど高部某となんいへる大名ありけり・・・其の藩に二つの党派を生じけり一の党派の巨魂を高部由己といふ主家同姓の門閥にて家老職を勤め・・・」とあり実質的に「椿説打岸波」を継続して連載しようとしたものであった。
ちなみに「椿説打岸波」と「昔譚花散里」の挿絵は玉亭（旭亭・一梅斎・胡蝶楼）芳峰（よしみね）